

ダイズ病害虫防除対策（6・7月）

1 各種病害虫共通の対策

- (1) 3年以上連作すると病害虫の発生が増加しやすいため、連作は2年までにとどめてください。また、できれば転作水田で作付してください。
- (2) 紫斑病、黒根腐病、べと病などの病害は多湿土壌で発生しやすいため、ほ場の排水対策を行ってください。

2 紫斑病

- (1) 種子は紫斑粒でないものを選び、種子消毒を行ってください（表1）。罹病種子を使用すると発芽不良や生育不良の原因になります。

表1 紫斑病の種子消毒薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用方法	使用濃度、1 kg 当たり使用量	本剤の使用回数
ホーマイ水和剤	チウラム	M3	種子粉衣	種子重量の0.5%	1回
	チオファネートメチル	B1			
キヒゲンR-2フロアブル	チウラム	M3	塗抹処理	原液20ml	1回
クルーザーMAXX	チアメトキサム	4A	塗抹処理	原液8ml	1回
	フルジオキサニル	E2			
	メタラキシールM	A1			

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

3 黒根腐病

- (1) 播種後1か月頃から地際部に褐変が認められ、成熟期前に葉が黄化して枯死します。
- (2) 乾燥種子1kg当たり原液8mlのクルーザーMAXXを塗抹処理してください。

4 茎疫病

- (1) 発芽間もない幼苗期から成熟期近くまで地際部近くに病斑を生じ、倒伏枯死します。
- (2) 乾燥種子1kg当たり原液8mlのクルーザーMAXXを塗抹処理してください。

5 べと病

- (1) 降雨の多い6～7月と9月に多発し、葉に黄白色の不整形病斑が発生し、病斑の裏には淡灰色の綿毛状の菌叢ができます。発生が多いと生育抑制や落葉がみられ、減収の原因となります。
- (2) 「里のほほえみ」など罹病しやすい品種では、生育初期から発生がみられるので、密植や過繁茂で通気性が悪くなり、湿度が高くなるように注意してください。
- (3) 薬剤による防除を行う場合は発生初期から7～10日おきに数回実施してください（表2）。

表2 べと病の防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度	本剤の使用回数
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	C3	収穫7日前まで	2,000倍	2回以内
フェスティバルM水和剤	ジメトモルフ	H5	収穫45日前まで	750倍	3回以内
	マンゼブ	M3			
ライメイフロアブル	アミスルブロム	C4	収穫7日前まで	2,000倍	3回以内
ランマンフロアブル	シアゾファミド	C4	収穫7日前まで	1,000～2,000倍	3回以内
リドミルゴールドMZ	マンゼブ	M3	収穫45日前まで	500倍	3回以内
	メタラキシールM	A1			

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

注) フロアブル剤、水和剤は10a当たり150～300L散布する。

6 ウイルス病（褐斑粒）

- (1) 種子は褐斑粒でないものを使用してください。
- (2) アブラムシ類がウイルスを媒介するため、アブラムシ類の防除を行ってください。
- (3) 生育中にモザイク症状や萎縮症状を確認したら速やかに抜き取り、ほ場外で処分してください。

7 タネバエ

- (1) 種子が食害され発芽しない、もしくは発芽後に子葉や胚軸が食害されます。
- (2) 魚粕、鶏糞などの有機質肥料を施用すると発生が多くなることがあります。
- (3) 種子消毒を行ってください（表3）。
- (4) 発生が多いほ場では、作付前や作付中に薬剤散布を行ってください（表4）。

表3 タネバエ、アブラムシ類、フタスジヒメハムシの種子消毒薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用方法	1 kg 当たり使用量	本剤の使用回数
クルーザー F S 3 0	チアメトキサム	4 A	塗抹処理	原液 6 ml	1 回
クルーザー M A X X	チアメトキサム	4 A	塗抹処理	原液 8 ml	1 回
	フルジオキサニル	E 2			
	メタラキシル M	A 1			

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

表4 タネバエの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用方法	使用時期	本剤の使用回数
ダイアジノン粒剤 5	ダイアジノン	1 B	作付前：全面土壌混和又は作条土壌混和、 作物生育中：作条処理して軽く覆土	収穫 30 日 前まで	5 回以内

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

注) ダイアジノン粒剤 5 は 10a 当たり 4～6 kg 使用する。

8 アブラムシ類

- (1) ジャガイモヒゲナガアブラムシはダイズわい化ウイルスを媒介することがあります。ダイズアブラムシやマメアブラムシは多発すると葉に黄色の吸汁痕が多くみられ、葉の萎縮などが発生します。
- (2) 発生を予防するため、種子消毒を行ってください（表3）。
- (3) わい化病が発生したことがあるほ場では、有翅虫飛来初期から薬剤防除を行ってください。それ以外のは場では葉に黄色の吸汁痕が目立つ場合は防除を行ってください（表5）。

表5 アブラムシ類の防除薬剤

	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度 (散布液量)	本剤の使用回数
地上散布	エルサン乳剤	P A P	1 B	収穫 7 日前まで	1,000～ 2,000 倍	2 回以内
	オルトラン水和剤	アセフェート	1 B	収穫 60 日前まで	1,000 倍	3 回以内
	ダントツフロアブル	クロチアニジン	4 A	収穫 7 日前まで	2,500～ 5,000 倍	3 回以内
	マラソン乳剤	マラソン	1 B	収穫 7 日前まで	2,000～ 3,000 倍	3 回以内
無人航空機 散布	オルトラン水和剤	アセフェート	1 B	収穫 60 日前まで	16 倍 (1.6L)	3 回以内

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

注) 地上散布の乳剤、水和剤、フロアブル剤は 10a 当たり 150～300 L 散布する。

注) オルトラン水和剤は使用時期が収穫 60 日前までなので、使用時期に注意する。

9 ツメクサガ

- (1) 6月中下旬と8月中下旬に幼虫が発生します。6月に発生する葉の食害は本種の第1世代によるものが多く、被害は突発的に発生することが多いです。8月の第2世代による被害は葉のほかに莢や子実を大きくえぐったように食害します。
- (2) 第1世代幼虫の食害が目立つ場合は防除を行ってください(表6)。虫齢が進むと加害が急激に多くなるため、防除が遅れないようにしてください。

表6 ツメクサガの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度	本剤の 使用回数
エルサン乳剤	P A P	1 B	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

注) 乳剤は10a当たり150~300L散布する。

10 フタスジヒメハムシ

- (1) 越冬成虫が5~6月に発生し、初生葉をえぐるように食害します。幼虫は土中で根粒を食害しますが、生育への影響は少ないです。8~9月に新成虫が発生し莢を食害するため、品質に影響します。
- (2) 発生を予防するため、種子消毒を行ってください(表3)

※農薬の登録内容については慎重に校閲していますが、登録内容の変更は随時行われています。また、同じ農薬名でも農薬会社によって登録内容が異なることがあります。農薬登録情報提供システムホームページ(<https://pesticide.maff.go.jp/>)等で最新の登録内容を確認してください(記載中の登録内容は令和5年5月23日現在)。